

# 大学における海外体験学習の効果と展望 —海外悉皆研修の可能性—

## Effects and Prospects of Overseas Experience Learning at University —The Possibility of Overseas Training for all—

清水 和久 (人間科学部こども学科教授)

Kazuhisa SHIMIZU (Faculty of Human Sciences, Department of Child study, Professor)

### 〈要旨〉

全国の大学では海外体験学習を行うところが増えてきており、中には学部全員の海外悉皆研修として実施しそれを「売り」としている大学もある。今後、本学でも学部や学科の学生に対して悉皆で海外体験研修が可能であるかを検討する時期に来ていると考える。筆者はこれまで、フィリピン、台湾、オーストラリアへ複数回学生を引率した経験がある。これらの海外研修について整理、分類を行わない、学生の学びを抽出する。そして、悉皆研修についてアンケート調査を行ったところ、台湾への海外研修のニーズは65%であった。これを受けて、今後の悉皆研修先として、台湾をとりあげ研修内容なども含め提案する。

### 〈キーワード〉

スタディツアー、海外体験学習、台湾

## 1 はじめに

海外体験学習を実施する大学も増えてきており、すべての学生に海外体験の良さを味わってもらいたいと考えている。「このような大学における『海外体験学習』」が広く注目されるようになったのは、2010年以降、政策として「グローバル人材の育成」が提起されてからであろう<sup>(1)</sup>。子島進・藤原孝原の分類によれば、海外体験学習は実施主体、期間、研修先、単位化、学習方法、インパクトの条件を加味すると、以下の9つに分けられる。「長期留学」「語学研修」「インターンシップ」「海外研修(フィールドスタディ)」「サービスマーケティング」「ボランティア」「ワーキングホリデー」「バックパック旅行」<sup>(2)</sup>

これらの海外体験を4年間の大学時代において、どの時期に、どのようなジャンルの体験をすればいいのかを体系的に考えてみたい。また将来教員になることを目指す人間科学部こども学科の学生にとっての海外研修の機会や内容のありかたについても考えたい。4年次の卒業旅行時になって初めて海外に行くのでは遅く、大学の早い時期に海外研修体験をすることで教育に対する視野も大きくなると筆者は考える。

## 2 研究の目的と方法

### 2-1 研究の目的

他大学の海外体験学習の体系を分析し本学での海外体験学習の在り方を明らかにするとともに、本学で筆者が関わってきた海外体験学習を分析することで、これから必要な海外研修の順序性や内容について提言する。

### 2-2 研究の方法

- 1) 他大学の海外体験学習の特徴の分析
- 2) 本学の海外体験学習の実施経過
- 3) 本学の海外研修の分類とロードマップ
- 4) 人間科学部の海外体験学習の人数と内訳
- 5) こども学科に必要な海外研修の特徴
- 6) 海外体験学習(台湾)に対する希望調査(1年生)
- 7) 台湾悉皆教育研修の展望
- 8) 台湾の悉皆海外研修としての展望

## 3 研究の結果

### 3-1 他大学の海外体験学習の分類と特徴

桃山学院大学海外体験学習ロードマップ<sup>(3)</sup>によれば、留学レベルが、「入門、初級、中級、上級」の4つに分けら

れ、そのジャンルも「語学研修系、海外ボランティア系、フィールドワーク系、キャリアアップ系」の4つに分類されている。

級別	ジャンル別海外体験学習			
↑ 上級	1年間の長期留学			
中級	語学研修 1学期	インド異文化ボ ランティア		日本語教育実習 アメリカインターン シップ
初級	短期語学研修 1か月	インドネシアワ ークキャンプ	各国 スタディーツアー	インターンシップ
入門	BPS (Beginning program step) 1年生限定			
ジャンル別	語学系	ボランティア系	フィールドワーク系	キャリア系

図1 2016年桃山学院大学海外体験学習ロードマップ (清水簡略化)

まず、入門編であるが、全学部の1年生のみが参加できるもので、4つの研修のすべてのスタートとして位置づけられている。行先としてアジアの4つの国(タイ、中国、ベトナム、台湾)から選択でき、BSP (Beginning Step Program) と呼ばれており、教師が引率し、1ツアー定員20名でおこなわれる。単位認定があり、費用は10万円程度。事前審査があり、春と秋の長期休暇の時に開催される。

初級編(3つ)は、「短期語学研修」があり、休みの期間に1か月程度、英語圏で5か国、非英語圏で7か国に行き語学の学習をするものである(単位認定有)。「ボランティア研修(約10日から1か月)」: 現地の人と触れ合いながらボランティア活動に参加できるプログラム。「スタディツアー(10日間)」: テーマにそって理解を深める: 現地で調査を行う実地調査のプログラム。(単位認定有)。

中級編(3つ)「国際インターンシップ(10日間から1か月)」: 2年生以上、海外の企業での就業を通して実践的なスキルを養う。「海外日本語教育実習制度」: 現地で日本語を教える制度、「海外英語特訓留学(語学研修1学期間)」などがある。

上級編(1つ)「長期派遣留学」: 海外で専門科目を学ぶことができるものがある。<sup>(4)</sup>

海外研修に行こうと思う学生は、ジャンルや難易度によって、コースを選べ、ランク付けしてあることで、自分のステップアップの道筋がわかり、計画が立てやすいと思われる。

日本福祉大学の国際福祉開発学部(定員80名)<sup>(5)</sup>では、多文化共生時代の地域社会や企業が求める日本語・日本文化を教える力をつけることをねらいとしており、中学・高校の英語教員の養成も目指している。この学部では毎年2月に1年次生全員を対象にした海外研修(海外フィールドワーク)を実施している。研修先は、フィリピン、インド、マレーシア、カンボジアなどのアジア各地の国と、アメリカに訪れている。研修先は協定校・協力校であり、現

地の大学がコーディネートし、大学生との交流も含まれている。学部の特徴からみても、1年次からの海外悉皆研修となっている。この成果もあってか、毎年海外青年協力隊へも人材を送りだしている。

### 3-2 本学の海外体験学習の実態

本学でも海外研修の機会が提供されてきた。今まで行われてきた海外研修を一覧にすると表1のようになる。

表1 金沢星稜大学海外体験学習の人数の経緯(2012年以降)

プログラム名	項目	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
長期留学 (4-8か月間)	協定留学	2	0	4	3	1	0	0
	人文学部全員対象	0	0	0	0	36	37	58
	全学部合計	2	0	4	3	37	37	58
	人間科学部合計	0	0	0	0	1	0	0
語学研修 (1か月)	カナダ	0	1	8	10	0	2	0
	オーストラリア	12	10	18	17	5	0	3
	ニュージーランド	0	0	0	5	4	0	0
	アイルランド	0	6	17	10	5	5	8
	アメリカ	0	0	0	2	0	0	0
	フィリピン	0	0	1	5	4	0	2
	全学部合計	12	17	44	49	18	7	13
	人間科学部合計	0	3	8	6	3	4	2
語学研修 短期 moon shot	フィリピン	0	9	86	68	58	80	56
	全学部合計	0	9	86	68	58	80	56
	人間科学部合計	0	5	4	7	5	2	1
エリアスタ ディーズ (7-10日 間)	アジア(シンガポール)				4	5	11	7
	北米				6	5	9	10
	アジア(インドネシア)				3	9	2	9
	欧州				10	6	11	4
	オセアニア				8	12	10	13
	全学部合計				31	37	43	43
	人間科学部合計				9	15	6	7
短期海外実習 (1-2週間) 単位認定	観光実習				5	11	12	12
	国際教育演習		11	17	14	0	15	13
	海外社会実習	7	9	6	3	0	5	0
	全学部合計	7	20	23	22	11	32	25
人間科学部合計	0	11	17	14	0	15	13	
個人・団体海 外研修 (1週間)	団体企画(台湾)				12	10	9	8
	団体企画(韓国)				9	15	12	0
	団体企画(タイ)							19
	個人企画							1
	全学部合計				21	25	21	28
人間科学部合計				12	10	9	27	
学外団体主催 企画(1-4週 間)	海外ボランティア				2	0	4	0
	海外インターンシップ			4	1	0	5	4
	協定校主催短期研修					7	18	6
	全学部合計			4	3	7	27	10
人間科学部合計			0	1	0	14	0	
全研修	全学部合計	21	46	161	197	193	247	233
	人間科学部	0	19	29	49	34	50	50

(金沢星稜大学国際交流センター提供のデータに基づき清水作成)

数字の記載ないところは企画前の段階を意味する。はじめにも述べたが、2010年度に政府がグローバル人材の育成を掲げたことによって、本学も国際交流を専門に扱う組織ができ、2014年度からは、短期大学部を中心としたフィリピンへの短期語学研修が企画されたことにより、人数が一挙に3倍の160人となった。また、2015年度から、エリアスタディーズと学生団体企画がスタート。2016年度からは人文学部の学部生全員が参加する長期留学がスタート。2017年度は、250名に迫る勢いである。2018年度に関しては、年度途中であり、最終的な人数は確定していないが、

これも実質250名に迫る勢いである。

### 3-3 本学の海外体験学習の分類とロードマップ

本学での海外体験学習の分類は、海外研修、語学研修、長期留学の3つに分けられている。<sup>6)</sup> 特に海外研修は、エリアスタディーズ、個人・団体企画海外研修、短期海外実習、学外団体主催企画の4つからなっている。桃山学院大学の分類にならうと、「ボランティア系」としては「学外団体主催企画」の中の「海外ボランティア」が該当し、「フィールドワーク系」としては、世界を5つのエリアに分けて行う「エリアスタディーズ」と授業の一環として行われる「短期海外実習」、そして、学生団体独自の企画としての「海外団体企画」が該当する。最後の「キャリア系」では、「海外インターンシップ」および、企画の内容にもよるが「協定校主催短期研修」も該当する。これらの内容を考慮して、4つの系列に分類し、難易度も考慮して、レベル分けすると以下ようになる。

級別	ジャンル別海外体験学習			
上級	長期留学 4か月から8か月			
中級	語学研修 1か月	学外団体主催海外ボランティア	団体企画海外研修 台湾、韓国、タイ	個人企画海外研修
	短期語学研修 2週間-1か月		短期海外実習(授業) フィリピン、インドネシア、ハワイ 協定校等主催短期研修(台湾)	海外インターンシップ 協定校等主催短期研修(フィリピン)
初級	エリアスタディーズ(1, 2年限定)			
入門	エリアスタディーズ(1, 2年限定)			
ジャンル別	語学系	ボランティア系	フィールドワーク系	キャリア系

図2 金沢星稜大学海外留学プログラム関係図(清水作)

エリアスタディーズに関しては、1, 2年次生限定で、おもに現地の大学生との交流や歴史・文化・社会とのふれあいなどの体験を通じ、国際感覚を身に付けるプログラムであり、各エリア10名ずつで、50人程度の募集となっている。教師が引率し、準備のための時間も多く取らないため、入門のグレードとした。

語学系では、語学研修の期間によって分類される。初級に当たる短期語学研修は、“Moon shot abroad”と呼ばれ、2014年から企画されたもので、60名から80名の女子学生が毎年フィリピンの語学学校での研修に参加している。中級の1か月間の語学研修は、カナダ、アイルランド、オーストラリア、ニュージーランドで実施される。

「ボランティア系」は、大学独自の企画は少なく、学外団体のCIEEなどが実施している企画に参加するという形でおこなわれている。参加人数はあまり多くない。

「フィールドワーク系」は、語学研修が目的ではなく、別に目的を定めていくのであるが、初級は原則教員が引率していくものとなる。そのため、授業として行われる「短期海外実習」は、事前授業として座学で学んだあと、現地

での実地研修となるため効果も大きい。具体的には、筆者が担当する「国際教育演習」は、前期の授業として「国際教育」の講義があり、フィリピンのことを十分学んだあとで、9月の集中講義としてダバオ市やセブ市の学校を訪れている。また、2017年度は観光実習としてタイ、海外社会実習としてロシアへの実習も行われている。

「フィールドワーク系」のもう1つの初級プログラムとして、大学の海外協定校が主催する短期研修も位置付けている。これは海外の協定校が企画する研修で、本校の大学生が応募し、現地の学校で他国の学生と一緒に活動するものである。2017年度は中国(上海体育学院)と、台湾(開南大学)で行われた。特に上海体育学院が主催したものは、人間科学部スポーツ学科の学生を対象としている。専門分野の体育を通して交流するので、語学以外の学びが大きい。

フィールドワーク系の中級としては、「団体企画海外研修」を位置づける。初級との違いは、学生が自主的に企画し、大学の許可を受けて実施され、教師の引率はない。2015年から始まった人間科学部こども学科の筆者のゼミによる台湾教育研修は、金沢の小学校と対話の小学校との国際交流支援という位置づけで行われている。学生は台湾の小学校を訪問し、現地での英語教育も参観できる。また、2018年度の3月には団体海外研修としてタイへ行く研修も企画されている。これらの学生は、初級に位置付けられる国際教育演習に参加した学生が多く、ステップを踏んでより高度な海外研修に挑戦していることがわかる。

最後に「キャリア系」であるが、初級として「大学コンソーシアム石川」が企画する「海外インターンシップ」を位置づける。また、企画にもよるが、協定校主催短期研修のフィリピンのエンデランカレッジが行った研修は、1週間の語学研修の後インターンシップとして現地の企業で3週間働くもので、インターンシップの経験としては充実した内容である。付け加えとして。このキャリア系の中級とし個人企画海外研修も位置付けておく。

### 3-4 人間科学部の海外体験学習の人数と内訳



図3 海外体験学習の参加者の人数(全体と人間科学の比較)



本学の人間科学部は2007年に開学したが、2012年まで人間科学部からの海外研修への参加はほとんどなかった。しかし、2013年に始まった「国際教育演習」を皮切りに学生の数が増加。2015年からは毎年ほぼ50名をキープしている。(2016年度は、国際教育演習がフィリピンの政治情勢で中止されたため例外とする) 2016年度は人文学部が創設された年度に当たるが、人文学部の長期留学の開始のために手を取られたためか、大学全体の海外体験学習の人数は減っている。また、全体としては、人数は伸びているが人間科学部としては2015年度から人数はあまり伸びていない。

以下2012年度から2018年度までの人間科学部の学生の海外体験学習参加の人数の合計とその内訳を表示する。ここで(表1)には記載されていないが、2018年度の夏に実施された「ベトナム・カンボジア スタディツアー」(こども学科池上ゼミ8名)、「フィールド演習(台湾)」(スポーツ学科大久保ゼミ4名)の人数も内容から判断して2018年度の団体企画海外研修に加算することとする。

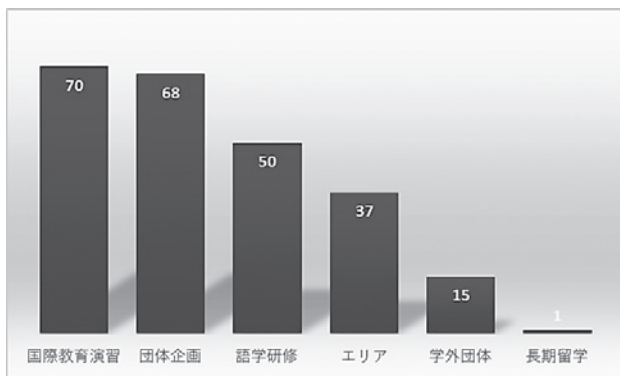


図4 人間科学部海外体験学習の種類と人数(2012-2018)

2013年度から始まったこども学科の国際教育演習(フィリピン)への参加者は毎年一定数の参加があり、グラフは5年分の合計である。団体企画は、2015年からのゼミとしての台湾教育研修が39名であるが、2018年度は、こども学科のベトナム・カンボジア研修とタイ研修、スポーツ学科のフィールド演習(台湾)が加わり一気に増えた。

2013年から行っている語学研修へのこども学科の参加は当初は多かったが、ここ1、2年は人数が減少している。

### 3-5 こども学科に必要な海外研修の要素

将来教員めざす学生にとって外国の教育の現場を見ることは視野を広めるうえでも重要である。筆者は、入門期に位置する「エリアスタディーズ(オーストラリア)」、初級に位置する「国際教育演習」の引率をスタート当初から行ってきた。また中級に位置付けた学生による団体企画海外研修(台湾)にもかかわってきた。この3つの研修の満足度の違いは、構成メンバーの親密度や訪問国の人との交

流の深さにも関係する。過去の学生の感想からも「観光地の見学よりも、外国の教育施設への訪問や現地の人との直接交流に価値をおいており、英語にはその交流手段として必要性を感じている」(清水2016)<sup>(7)</sup>ことが明らかになっている

まず一緒に研修に行くメンバーの構成であるが、人間関係ができていほうが研修の成果としては大きくなる。その意味で、学部を超えて集まる入門用のエリアスタディーズは、人間関係を作るのに時間が必要となる。しかし、教育に関して興味があり、日ごろから互いのことを知る機会の多いメンバーが集まる団体企画海外研修の方が満足度は高くなるのは当然である。

また大学が行う海外体験学習ということで現地の学校への訪問や先生との交流など、人との交流が設定されていることは重要であり、訪問前からSNSなどでつながることができれば、さらに効果は大きい。

最後に、事前の課題意識と、事前調査が十分であることも重要である。ネットや本で事前に調べ、それでもわからないことを現地で尋ねるという姿勢を学生に持たせたい。

以上のことを踏まえて、入門期では、教師が引率し、学生の不安感を取り除くと共に、現地での交流をコーディネートして英語への必要感を感じさせ、視野を広く持つことの重要性を体感させたい。

初級では、フィールドワーク系においては、十分な事前学習と、SNSを通しての事前交流ができるとよい。筆者の行って来た「国際教育演習」では、事前に海外と交流をし、現地で協働制作する活動を取り入れるなど交流に比重を置いた活動を意識した。

最後に中級にあたる団体企画海外研修において、質の高い企画にするためには、教員のアドバイスを、現地での教員の人脈も必要となってくるが、交通手段や現地での活動も含めて、学生自身がすべて企画できることが重要。

小学校英語の導入を控え、語学研修も重要ではあるが、教育者としての、外国の教育現場や子供に接する機会を多く取り入れることがさらに重要であると考えられる。

### 3-6 海外研修の希望調査

こども学科の全学生に在学中のなるべく早い時期に、海外体験学習の経験を持たせたいと考えている。こども学科の1年生に海外研修先として台湾を想定してアンケート調査を行った。

時期 10月22日1限

対象 こども学科1年「教職入門」の講義受講者  
(n=71)

海外研修に関するアンケート項目

- 1) 大学1年間で海外に行った経験、及び行く予定はありますか?
- 2) いいえの人 → これから機会があれば行ってみたいですか?
- 3) 台湾に行く研修があったら参加してみたいですか? (2年の2月)
- 4) 参加したい人 →台湾で行いたい研修内容を選択せよ(複数回答可)  
1日グループ行動 小学校訪問 幼稚園等訪問 大学生との交流
- 5) 参加したくない人の理由(自由記述)
- 6) 大学時代に海外に行く経験が必要だと思えますか?

結果

- 1) はい 24名 (34%) いいえ 47名 (66%)
- 2) はい 43名 (60%) いいえ 4名 (6%)
- 3) はい 46名 (65%) いいえ 25名 (35%)
- 4) 1日グループ行動35名 小学校訪問30名  
幼稚園等訪問29名 大学生との交流17名
- 5) 参加したくない人の理由(自由記述)  
・台湾に行ったことがある 4名(高校の修学旅行)  
・怖いイメージ 2名 ・予定がわからない 2名  
・お金がかかる 2名 ・親の反対 1名  
・観光で行きたい1名 ・もっと早い時期に行きたい 1名  
・いけるかわからない 1名 ・興味がない 1名  
・特に理由はない 4名 ・理由の無回答 5名
- 6) はい 71名 いいえ 0人

1学年(約70名)全員が一度にまとまって海外研修に行くという前提で考えると、安全面、政治情勢、交通費用なども考えて、これまでの団体企画海外研修での実績もある台湾にターゲットを絞った。

1年次生の海外旅行経験者及び年度内の予定者は24名(34%)。行く予定のない者47名のうち43名が希望しているので、あわせて94%は海外研修の予定があるか、もしくは希望していることになる。また台湾への積極的の希望者は71名中46名(65%)であった。

希望する内容としては、「グループ別行動」および「現地の教育施設の見学の希望」が多かった。一方台湾に行きたくない理由として、「高校の修学旅行で1度行っている」「イメージ的に怖い」と考える学生が若干いた。そのほかの理由は、特に台湾特有の理由ではないと考える。最後の問6で、海外体験自体には全員がその必要性を感じていることがわかった。

石川県の高校には、修学旅行先として台湾に行く学校が複数存在する。そのような学生にとっては、海外研修先としてまた同じ国に行くのは抵抗があるかもしれない。しかし、大学の海外研修の訪問地は現地の幼稚園や小学校などの教育施設を対象とするので、高校の修学旅行とはまた違った成果を得られるはずである。

時期については、3年次になると教育実習などが入ってくるので、長期休暇には動くことは難しくなる。そのため毎年3年次に進級する前に進んでいる学科の新3年次全体研修として実施することが想定できる。3年次の新しいフィールドのスタートとして海外研修を行うことで協働学習の体験を通してフィールド内の互いのメンバーの団結を深める機会となる。

3-7 実施されてきた台湾研修の内容

ここではこれまでの4回の団体企画海外研修(台湾)について、その実施した内容を提示する。

表2 2015年度 台湾研修 (2016.1.3-1.11) 8泊9日

日	訪問地	内容 (参加者12名)
3(日)	移動日	小松空港-羽田空港-台北松山空港
4(月)	台北市	日新国民小訪問 授業参観
5(火)	台南市	新山国民小訪問 授業参観 烏山頭水庫見学
6(水)	嘉義市	文雅国民小訪問 ワークショップ実施
7(木)	嘉義市	嘉義市市内探訪 夜市
8(金)	台中市	台中教育大学訪問 学生交流
9(土)	台中市	台中市内探訪 博物館
10(日)	台北市	台北市内探訪 九份探訪
11(月)	移動日	台北松山-羽田空港-小松空港

表3 2016年度 台湾研修 (2017.1.3-1.9) 6泊7日

日	場所	内容 (参加者10名)
3(火)	移動日	小松空港-桃園空港-台北市
4(水)	台北市	日新国民小訪問 ワークショップ実施
5(木)	嘉義市	文雅国民小訪問 ワークショップ実施
6(金)	嘉義市	嘉坪港国民小訪問 ワークショップ実施
7(土)	台北市	台北 淡水探訪
8(日)	台北市	台北 九份探訪 十份探訪
9(月)	移動日	桃園空港-小松

表4 2017年度 台湾研修 (2018.1.3-1.9) 5泊6日

日	場所	内容 (参加者9名)
3(水)	移動日	小松空港-桃園空港-台北市
4(木)	台北市	日新国民小訪問 授業参観
5(金)	嘉義市	午前 文雅国民小授業参観 午後 精忠国民小 交流
6(土)	台南市 高雄市	午前 億載国民小交流 午後 新甲乙国民小交流
7(日)	台北	台北市内探訪
8(月)	移動日	桃園空港-小松 九份観光

表5 2018年度 台湾研修 (2019.12.31-1.6) 6泊7日

日	場所	内容 (参加者8名)
31(月)	移動日	成田空港-桃園空港-台北市
1(火)	台北市	台北市内探訪
2(水)	台北市	五常国民小訪問 授業参観 交流
3(水)	嘉義市	精忠国民小訪問 授業参観 交流
4(木)	高雄市	親甲国民小訪問 授業参観 交流
5(金)	台北市	九份探訪
6(土)	移動日	桃園空港-小松 九份観光 十份観光

この企画は、筆者のゼミ生が、金沢市内の小学校と台湾の小学校の国際交流学習の支援として行って来たものである。毎年台湾の複数の小学校に訪問し、英語の授業を参観、学生自らが日本文化を紹介し、世界のことを考えるためのワークショップを行い。帰国後は金沢市内の小学校に台湾で体験してきたことを話してきた。2017年度の団体企画(台湾)の参加者は9人であり、参加した学生の感想から、研修の成果として以下のものがあげられている。<sup>(8)</sup>

- ・台湾の小学校英語教育と日本の違い
- ・台湾と日本の小学校教育システムの相違点
- ・教育者としてのコミュニケーションの必要性
- ・教材としての台湾の文化の理解

2001年度から小学校英語が始まった台湾では、高学年では英語専科による授業が週3回の英語のペースでおこなわれている。英語の授業では、書くこと、読むことが取り入れられ、日本の2020年度から外国語の授業を先取りしている。また、台湾では小学校にお昼寝の時間があること、下駄箱がないこと、プールも一般にはなく、天気が良いため体育館もないなど、多くの相違点に気づくことができる。

台湾は親日国でもあり、街中の看板も漢字（繁体語）のため、日本人は意味が理解できるため精神的にも安心できる。それゆえ海外研修先としては難易度が低く、訪問しやすい国であると考えられる。

### 3-8 台湾の悉皆海外研修としての展望

ここで、2年次の3月に台湾で実施する悉皆海外研修としての可能性を考えてみたい。こども学科の1学年の学生数は75人であり、教師のみの引率は難しく、旅行会社のバックアップが必要となる。また多くの教員の同行も必要となってくることで、費用も安くするために期間は長くても、4泊5日程度が妥当である。

また、交通手段であるが小松空港から台湾へは航空便が就航しているが、小松空港発の便は夕方の便しかないもので、関空まで前日に大学所有のバスで行き、関空から朝の便で出発したほうが台湾での滞在時間を長くすることができる。

訪問先の小学校は嘉儀市の小学校とする。これまで本学の学生の訪問を複数の学校で受け入れてもらった実績がある。また、この市には小学校英語を学習する専門施設が3つあり、市内の小学校が交代で活用し、英語の授業をここに受けに来ている。2020年から小学校英語が教科となる日本にとって、参考になる施設である。

幼稚園、保育所に関する施設の訪問は今後交渉する必要がある。最後に、グループ活動を予定している台北市内は、交通の便もよく、地下鉄も発達しているので、活動に

問題はない。また、南部の高雄市では同じ教育系の大学生との交流も実現させたい。これらの要素を取り入れた日程が以下の表5である。台湾の南北を縦断する形で、台湾新幹線に乗る機会も取り入れたい。

表5 台湾悉皆教育研修の日程の提案（4泊5日）

	場所	内容
0	国内移動日	夜行バス泊 金沢—関西空港
1	移動日	関空—桃園空港—台北 台北夜市観光可
2	台北市	台北市内 グループ活動
3	嘉儀市	市内小学校・幼稚園訪問、英語施設訪問参観 文雅国民小、精忠国民小等
4	高雄市	現地の教育系大学生との交流
5	移動日	高雄空港—関西空港-金沢（バス）

## 4 まとめ

以上、現在大学には様々な海外体験学習の機会があることがわかった。大学全体としては海外研修に参加する学生の数は伸びているが、人間科学部からの参加者は2015年からはあまり伸びていない（図3参照）。そこで、これまでの団体企画（台湾）の研修成果を生かして、人間科学部のこども学科の学生全員が参加するフィールド系の海外研修を提案した。

大学生自身は全員海外体験学習の必要性は感じている。また、様々な海外研修プログラムも用意されている。しかし、全員がその機会を生かしているわけではない。全員参加の悉皆研修にすることで、これから次世代の子どもたちを育成する仕事に関わる学生に、外国の子どもたちの姿や教育施設、教育システムと出会う機会を保障し、日本の教育について広い視点から考えて欲しいと思っている。

課題としては費用面と人数面、引率者の問題が考えられる。渡航費用に関しては、1年次からの積み立て方式で行いたい。人数は、1学年の人数が80名程度であり、同時に動くには難しい面もあるので、全員で移動する活動は少なくして、小グループに分かれて複数の地域や学校に訪問するなどの方法が考えられる。最後に引率であるが、より多くの教員に外国に行く機会をつくり、訪問先の教育機関との接点を持ってもらう下準備が必要であると考えられる。今後数年のうちにぜひ実現させたい。

## 注

- (1) 大学における海外体験学習への挑戦 子島進・藤原孝原 P1ナカニシヤ出版 2017
- (2) 同上 P4
- (3) 桃山学院大学FD推進委員会FD NEWS Vol.11 [http://www.andrew.ac.jp/info/fd/pdf/fd\\_news/voll1.pdf](http://www.andrew.ac.jp/info/fd/pdf/fd_news/voll1.pdf)
- (4) 桃山学院大学 <http://www.andrew.ac.jp/international/>

- (5) 国際福祉大学 <https://www.n-fukushi.ac.jp/index.html>
- (6) Study abroad report 2017 金沢星稜大学国際交流センター
- (7) 教育系学生の海外研修の実態 清水和久 2016金沢星稜大学人間科学研究第10巻1号P14
- (8) Study abroad Report-2017- 2017年度海外研修報告集 pp76-pp86 金沢星稜大学国際交流センター